

体験し自ら考える授業重視



2020年度以降、小学校から順次実施される新学習指導要領が重視するのが「主体的・対話的な深い学び」だ。田園調布学園中学・高校（東京都世田谷区）は約20年前から実践してきた。授業の進め方など創意工夫が必要で、教員たちの刺激にもなっている。

16日にあった高2の物理の授業は「惑星の運動」がテーマだった。入英樹教諭は、惑星の運動の法則、

田園調布学園中高



物理の授業で、「万有引力の比例定数」について調べる生徒たち。東京都世田谷区の田園調布学園中高で

法則の提唱者、提唱された経緯をクイズ形式で出題し、生徒同士で考える時間を与えた後、解説して

いく。今度はこう声をかけた。「万有引力の比例定数を求めてみよう」。生徒たちは前後や隣の席同士で話し合いを始めた。「何で調べたらいいい?」「この計算式は使えるかな」。ノートパソコンや教科書で調べながら、グループごとに「答え」を導き出した。

田園調布学園がこうした「協同探究型授業」を導入したのは00年ごろ。教育内容をスリム化する「ゆとり教育」の実施時期にあたり、「体験し自ら考える授業」を重視し、独自に始めた。入教諭は「探求」について「生徒同士が協力しながら知識を身に付け理解を深めていくこと」と考え、「授業では基礎知識を付けた上で探求に入ることや、歴史や数学など他の授業の要素も取り入れて多面的に考えられるように意識している」と話

す。

ただ、入試広報室長の細野智之教諭によると、導入当初はプレゼンテーションや考察の時間を増やすだけにとどまる授業もあった。「教員が授業の手法を相談し合い、試行錯誤を繰り返して改善してきた」と振り返る。

2年前からは「数学×物理」「国語×美術」「物理×音楽」といった科目横断の授業も各学年で年1、2回実施している。細野教諭が考案した「数学×美術」の授業では、幾何学模様を描くことができる「デザイン定規」を使って描いた花の花びらの数を数式で導き出した。数学の知識がデザインにも応用できることを学び、幅広い視野を持つのもう一つ狙いだ。授業を作る大変さはあるが、作り込む楽しさもある。生徒の知的好奇心を刺激できるような授業をさらに増やしていきたい」と話している。

【田中理知、写真も】